

## メリトクラシーと愛

大原 莊 司

Ohara Soji

「メリトクラシー」は、マイケル・ヤングの「メリトクラシーの勃興」<sup>1)</sup>にはじまる言葉であるが、メリット／デメリットという評価の物差しを特別に重視する社会の傾向をいう。「目に見える成果による能力評価主義」と理解してもよいかと思う。竹内洋の「日本のメリトクラシー」<sup>2)</sup>には、メリトクラシーの存在理由の説明理論や能力のさまざまな見かたについて興味深く論じられていて大変参考になるが、教育社会学に立脚してまとめられている。また学校教育におけるメリトクラシーの問題については、堀尾輝久の「現代社会と教育」<sup>3)</sup>に深く掘り下げた議論が見られる。本ノートの主旨は人間の個として、メリトクラシーをどのように克服するかという問題に重点を置いている。

最近、秋山博正、原田和男、松田正典は「文明のダイナミズム」<sup>4)</sup>という共著論文のはじめに「学校化、企業化社会の中で、メリトクラシーは、子供たちに効率主義と能力主義の人格形成を求める。その結果、効率や能力という評価尺度で計量可能で、何かの目的のための手段として有効な人間だけが社会の組織に受け入れられるようになる。」点に問題の所在を見出し、「科学文明を生きるということは、メリトクラシーを生きることなのである。」という理解のもとにこれを表層文化として、アマタクラシー（アマタ＝無量）という造語で大乘仏教に基づく深層文化を表現し、相補的なデュアル・カルチャー論を展開している。この論文の全体を理解し論評する能力は筆者にはないが、文明論の形をとりながらも人間の生き方に直結する指摘に啓発され、本ノートをまとめる動機の一つとなった。

そもそもメリトクラシーの源流を訪ねれば、何かをすればある都合のよい結果が得られると考える有所得の観念、因果（原因と結果の直結）を強く信ずる観念ではないかと考える。確かに今までの倍だけ勉強すればそれなりの結果が得られるだろうことは一見あきらかだから、有所得の観念は否定しにくいのである。ただ、倍勉強したから常に倍の成果が得られるわけではないという非線形の関係がこの世の原理の一つであるから、有所得の観念では人も社会も救えない。またわれわれの眼に結果として映るあらゆるものが、有所得の行為によるわけではない。すなわち、偶然の働きである。偶然の事故や災害に遭遇して瀕死の人の魂は有所得の観念では救えない。逆に、偶然によって大きなメリットを得たと思えることも日常茶飯事である。（ここでいう偶然は、カオスとしての偶然であり、後に述べる因縁に近い意味を持っている。）また、失敗というデメリットが返って成功の種になることは多い。人格の形成まで考えると、むしろ失敗によってこそ成功に導かれると考えるほうが正しいのではなかろうか。学校教育の場では、成功して得られた成果を体系化したものを教材として教えようとするのが常であるから、根の深いジレンマが存在することになる。成果を体系化したものは一定の因果の文脈に乗ったものである。その文脈を効率的に習得することを能力ありとして評価するならば、その評価は主に言語中枢の発達程度をテストしているだけになるのではないか。谷 昌恒が「私の道徳教育論」<sup>5)</sup>の中で、「感謝すべきことの本当の意味は難儀が有ることなので

はないか。」と述べている。自分が納得できる失敗や難儀、課題が与えられることは幸運なことであるが、それを教材としてわざわざ提供することは大変難しい。林 竹二が「教えるということ」<sup>6</sup>の中で、「教師が教えたことを持って、それが子どもの追及したい課題に転化するために、いちばん大事なことは、教師がたえず子どもに学んでいく能力をもつことです。」と書いているのは、この難しさにも関係している。

メリトクラシーは因果を信ずると述べたが、人間が自然界をモデル化し単純化して、理解し易くするために作り上げた因果性を、実在とする見方とつながる。因果性については、ヒュームなどイギリス経験論者による批判が有名であるがここでは、細川巖の「信は人に就く」<sup>7</sup>のなかの次の文章を引用する。

「一本のローソクがあつてよく燃えている。風が吹いてきてこの火が消えた。ローソクが消えた原因は何か。風が因で、風が吹かなければこんな結果は起こらない。こんな考え方は因果関係という。因と果で考える。しかし仏法ではそうは言わない。それを空という。ローソク自体に問題があるのである。ローソクの火が小さいことに問題がある。その証拠に、そのそばに大きなかがり火があつてそれに同じ風が吹く。するとその火は消えるどころか盛んに燃え上がっているではないか。風にあつて消えるか燃え上がるかは火が小さいか大きいかに原因があつてその因はローソクやかがり火それ自体にあるのである。風は縁なんだ。これが因縁という考えである。」これは、新たなメリットを発見しようという意味で引用したのではない。目に見える因果関係だけで物事を判断するのは間違いだという意味である。本当の教育の成果は、教えようとして教えた因果関係上にはなく、予期せざるところにあるはずである。玄則の「如何なるか是、学人の自己なる（修行者のあり方）」の問いに対する法眼禅師の答え「丙丁童子来求火<sup>びようぢょうどうしらいくか</sup>」について酒井得元老師は「火が火を求める。すなわち自己が自己を求める。ただ因縁が存在しているだけだ。」と説いている<sup>8</sup>。因縁情報の入力による心（唯識でいう阿頼耶識）の秩序状態の形成が悟りなのではないか。広島・長崎の原爆は戦争終結を早めるためだったという主張は因果性に偏ったとらえ方で、オバマ大統領のプラハ演説の「道義的責任」発言は因縁性に落ちついたとらえ方である。

「文明のダイナミズム」では、『科学技術の世界はメリトクラシーそのものである。メリトクラシーがどれほど負債を抱えていようと、これを否定することはできない。「物を量り、物を評価する能力」は「道具を使う技術」と「道具を作る技術」を開発し、それらを継承させることによって今日の驚異的發展を導いたからである。』とある。この場合も、科学と技術は分離して考えたほうがわかりやすい。速さや時間を客観的実在として測定対象とするのが近代科学の出発点であったが<sup>9</sup>、それは錬金術のようなメリット思考から独立して価値自由を勝ち取る過程でもあったのではないか。再現できるある条件の下で、測定可能な量の間に特定の関係が普遍的に成立することを見出すのが科学の目標の一つであるが、そのために測定量に順位をつけるというような過程はあってもそれがメリトクラシーに直結するとはいえないだろう。一方、技術の発展の主軸にメリトクラシーがあることは容易にうなずける。独創的アイデアは因果性よりは因縁性の発想によって生まれると思われるが、既存技術の発展の牽引力ではメリトクラシーに役割が移る。とはいえ、経済合理性に偏った従来のメリットは、現在の環境問題、エネルギー問題と金融危機という結末を受けて、あらゆる技術分野で再検討がなされている<sup>10</sup>。技術の発展がM・ウェーバーのいう合理性によるのか、H・マルクーゼがいうように合理性に名を借りたイデオロギーによるのか<sup>11</sup>、それともメリトクラシーによるのか、社会学ではさまざまな議論がある。ホンダのスーパーカブ、マイクロプロセサー、インクジェットプリンタの成功は、それまでの市場やそのメリットを破壊する破壊的技術と呼ばれている<sup>12</sup>。これらの技術もまた同じ運命をたどるであろうが、競争によって追い込まれたがゆえに、発想され受け入れられたわけではない。少なくとも、競争原理だけで技術の進歩を論ずることはできないだろう。行き詰まったときにも自由な発想が許される状況かどうか持続的転回の大きな要因である。技術の分野では、開発した技術が売り物になるかどうか

かという目に見える成果だけで開発技術者を評価するという現場の問題も存在し、これは学校教育の問題にもつながる。

メリトクラシーの浸透が最も激しいのが教育の場である。能力や努力の成果が最も点数化されやすい分野である。教師という個人に内面化された教育的メリットは、学ぶものの能力に応じて教育することが可能であり、その成果を評価することが可能であるという前提に立っている。英語という固有の科目が立てられ、その学習成果が点数によって評価され、それによる挫折で科目という枠を超えた多くの英語嫌いの若者を作っているのが今の高校までの英語教育の現状ではないか<sup>13</sup>。その点数評価から得られる偏差値によって、進路が決められている実情がある。英語や国語はすべての勉強の基礎と考えられ無機的扱いを受けている。とかく教師は、自分が階段を登るように基礎から応用へと知的に成長してきたと錯覚しがちである。基礎のメリットが応用のメリットを生むと考えがちである。これは、学問体系という同時因果に人間の成長を強引に当てはめているに過ぎない。一方、人間の発想や考え方、勉学の意欲が、感情という非学力的要素の影響を大きく受けることが実証されている<sup>14</sup>。形に現れる知性の教育より、感情の教育、心の働かせ方の教育がより基本的なのではないか。幼稚園の砂場の教育の意義も十分認識されるべきである。

近代型能力が基礎学力とすれば、ポスト近代型能力は対人能力や意欲であり、今度はこちらをメリットとして教えないといけないという風潮がある。本田由紀は「多元化する能力と日本社会」<sup>15</sup>のなかで次のように述べている。「そもそも、意欲や創造性など、内面的性格が強い「ポスト近代型能力」に、学校教育が直接に介入しようとする自体が是認されうるのかを問う必要がある。」メリトクラシー社会の立役者である教育者は、何事も教えることができると思う錯覚に陥りやすい。教えたいのは人間の煩惱であるからやむを得ないが、自分の意欲や創造性など自分がどのようにして獲得したのか振り返ってみればその誤りは明らかである。ソ連は69年を費やしても共産主義者を教育によって養成することが出来なかったのである。一灯園の石川洋の言葉にあるように「育成は折りである」の立場を堅持すべきであって、自分や社会が理想とする人間を人間が育成できると思い上がるべきでない。教育者であった筆者の父はこのことを「期して期せず、期せずして期す」と表現している。メリトクラシーの教育上の問題はまた、相対的な価値を持つとしか思えない「能力」やその成果物が人を評価する尺度となって、絶対的な威力を持って個人に迫ってくることの問題である。かたや無気力症候群の学生に、単位がどうの就職がどうのとメリットを振りかざしてもまったく心に響かない。競争原理や能力主義が人間を内発的に動機付けるという暗黙の前提は普遍的ではない。遠山啓の著「競争原理を超えて」<sup>16</sup>の中に、「他人との競争心ではなく、人間の本性である事物そのものに向かう知的探究心・知的好奇心が十分に発動できるような条件をつくってやればよいのである。」とある。この条件作りは簡単ではないが競争原理に逃避するよりはましである。産業社会を進化させている主成分も競争心ではなしに、使命感のようなものではないのか冷静に分析してみる必要がある。内発的動機付けは教育者の理想とするところであるが、E. デシとR. フラストは「人を伸ばす力」<sup>17</sup>で次のように述べている。「内発的動機付けとは、活動することそれ自体がその活動の目的であるような行為の過程、つまり、活動それ自体に内在する報酬のために行う行為の過程を意味する。」「私は、内発的動機付けの経験それ自体に価値があると信じている。バラの香りをかぐこと、ジグソーパズルに熱中すること、日差しが雲にきらめくのをしみじみ眺めること、ワクワクしながら山頂にたどり着くこと。これらの体験を正当化するために何かを生み出す必要はない。そのような経験のない人生は人生でないとさえ言えるかもしれない。」とはいえ、行動とその結果の結びつきの強調が方便として必要なことは、法華経譬喩品「三車火宅の喩え」に説かれるとおりであるが、結果が失敗に終わることのほうが圧倒的に多いと心得なければならない。

またメリトクラシーには、個人主義<sup>18</sup>という前提があるのではないか。ピューリタニズムでの個人と神の直結の歴史が前提されているのではないか。近代日本は、合理主義は取り入れたが個人主義は取り入れなかった。そのことが西洋流学校教育を虚無化し無気力な若者を生み出している原因の一つではないか。住んでいる社会は個人主義的ではないのに、評価はいたって個人主義的である。自己の確立の前に評価が先行している。メリットを基準とした事物の善し悪し自体も、数値化によって基準が設定しやすいからといって、容易に判断できるわけではない。床暖房は、ガスがよいのか、電気がよいのか分別できる有力な判断基準が今あるわけでもない。一方を生かすために他方を犠牲にするトレードオフの関係は、あらゆる技術要素に存在する。開発競争に勝ち残った新薬に耐性菌が現れた場合、敗れた抗生物質の復活のチャンスが予想されるだろう。またよしんば判断できたとしても、長期的には「人間万事塞翁が馬」であることを理解すべきである。太平洋戦争の悲惨な結末の原因が日露戦争の表面的勝利にあったと言えなくもないのもその一例である。ともあれ、人生や社会の転変のいきさつを因果の文脈で全体化し、安易に物語ることは慎まなければならない。偏差値の導入によって進路指導の利便性は増大しているが、本当にどの進路を選ぶべきかの苦悩はより深まったといえるのではないか。臓器移植技術、再生医療技術の今後の進歩は遠からず、現在の環境問題とは比較にならない深いジレンマを人類に提供することだろう。むしろ、そのようなジレンマの明確化がメリトクラシーの真の存在理由ではないかとさえ感ずる。数値化によって目の前の迷路がはっきりしただけの事で、全体が迷路であることに変わりはない。競争原理は、市場価値が貨幣という汎用記号に変換されて起きる経済現象に幻惑された幻想であり、少なくとも教育の現場に持ち込まれるべきものではない。ましてそれに乗じて教育機関を無責任にランク付けするなどは罪悪深重である。

全体的価値は個人に具現するという幻想が個人主義の基底に存在するように思うが、そのために能力のあるものが社会を指導するのは当然であるという錯覚に陥ることになる。アメリカ大統領選における候補者同士の論争のあれほどの盛り上がりは、個人による価値の具現とその活用という認識で文化の違いを感じず。ジェームス・サロウイスキは「The Wisdom of Crowds」<sup>19</sup>の中で、一握りのエリートが主導権を握る社会からネットワークによる個人の考えの連合によってエリート以上の指導的知が獲得されつつあると分析している。

「文明のダイナミズム」では、メリトクラシーは止められないという考えに基づき、アミタクラシーとの相補性による解決の道が提案されている。本ノートでは、少なくとも個人の生き方においては止められるのではないかと考えて以下に論じたい。

まず、メリトクラシーのような人間の名聞、利養、勝他の心に沿った価値観の大転換は宗教的アプローチが挑むべきものである。宗教とは、世間的価値観にとらわれない精神の真の自由を目指すものというのが本ノートでの前提である。一時的で相対的な価値観を超える普遍性を求めながら、その普遍性、全体性を純化する（無所得、無所悟、価値自由にする）働きを同時にもつのが真の宗教であると考え<sup>20</sup>。問題はその普遍性と個人の精神が具体的にどういう言葉・概念を通じて日常の一刹那に連なり、メリトクラシーを超えて希望を失わずに生きて行く力となるかという点である。

慶応大学の漢方医であり牧師であった相見三郎との邂逅で、筆者は伝統的宗教というものに20代の初めに接するご縁を得たが、相見の著書「コリント人への第一の手紙講解」<sup>21</sup>の一節を以下に引用する。

『わたしに予言する力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。』ギリシャ語の聖書の愛という言葉は、フィオレー、アガペーに使い分けしてあるが、日本語の聖書はどちらも愛です。これは翻訳のことではなく、民族の信仰告白です。愛の使い分けの思想がないのです。ですから、仏教でいう煩惱を聖書では罪というのですが、マタイ福音書にある「わ

たしよりも父または母を愛する」というその愛が煩惱であり、罪のことです。アガペーという聖なる愛と、罪なる愛というものが、日本民族には使い分けられないのです。親が子を抱きかかえる煩惱、それが神の愛そのものだとすることが日本民族の信仰なのです。それはまさに聖書の告白であり、聖書の思想です。「おのれの如く、なんじの隣を愛すべし」これは、いうまでもなく聖書の中心的メッセージです。それは、おのれを愛する立場、おのれを愛する煩惱、その愛を人に移すことです。それがアガペーになるのです。」「わたしたちはわがままな人間愛を、神のアガペーにまで昇華することを目指しているのです。」「教育勅語を抱えていた日本民族が、あの時に滅ぼされたのはなぜか。勅語の中に愛がなかったからです。』

沢木老師の言葉に「得は迷い、損は悟り」というのがある。老師は「禪戒本義を語る」<sup>22</sup>のなかで、「仏法は不可得なのである。仏法は有所得の心をもって求めてはならぬ。馬鹿骨を折りとうて、一生懸命馬鹿骨を折ることに努力した。なるだけ縁の下の力持ちをやって、なるだけ損をする。」と述べている。十代の後半、ニーチェやキルケゴール、道元禪師の著作など反メリトクラシーの本を読み耽っていた頃、無駄骨を折ることが愛というのではないかと直感したことを今でも憶えているが、つい最近、愛についてこのことに符号する記述に遭遇した。それは、ヤスパースの愛の規定「具体的な行いを通じて、絶対性や全体性に向かう運動」である。これは、日立デジタル大百科辞典<sup>23</sup>に引用されているものであるが、ヤスパースは「真理について」<sup>24</sup>の中で、「愛は真理への運動である」とも述べている。自分の人生の光明に久しぶりに再会した思いがして、本ノートをまとめる第2の動機となった。われわれ凡夫は容易に悟ることはできないが、こころに愛を持つことはできるのである。

仏教における愛に対する言葉は慈悲であると一般にいわれる。「慈悲」はいわば仏の方からの愛である。衆生が主語である場合には慈悲というのはいはばかられる。また「菩提心」は逆に、衆生の方から仏に向かうイメージの言葉である。十二支縁起でいわれる愛は、渴愛の愛であって今の場合の愛にはあたらない。いわゆる愛憎を超えた平等のこころを仏教では捨という。聖徳太子の「勝鬘教義疏」<sup>25</sup>には、捨身の思想が解説されている。これは、金光明最勝王經第十捨身品に説かれる薩埵王子の捨身飼虎を典拠にするものである。聖徳太子の仏教信仰は捨身を考えられるほど深くかつ具体的なものであったのである。その信仰の力が隋の煬帝にたいする「日出ずる国」の書簡となって現れたのであった。日本の仏教はこの捨から始まっていることになるが、現代日本人の心情に捨の思想を呼び起こすことは困難である。いや古代でも困難であったために聖徳太子の悲劇があったのではないか。

メリトクラシーは、個別的で短期的にしか成立しない法則なのではないか。突然変異によって現れた形質で環境適応できるものが残されていくという、因果関係の明瞭な一筆書きの進化を生物の進化の法則は、否定している。近年、SPIと呼ばれる常識テストで就職希望者を選別する方法が多くの会社で採用されているが、そのことによって長期的には本当に必要な人材を失う可能性も指摘されている。われわれの日常世間的なさまざまな価値観は、十分な検証を受けているわけではない。個人の人生に適用する場合には、その普遍性を確認する必要がある。「10年後の自分へ」<sup>26</sup>というテーマの作文で、10人に8人ほどの女子高校生が「いま幸せですか」と自分に問いかけている。それを読む度に内山老師がよく言われていたことを思い出す。「もし幸せが人生の目標であるなら、人間は絶望のどん底で死んでいかなければならない。」

ヘーゲルは、「キリスト教の精神とその運命」<sup>27</sup>のなかで、「愛は精神の和合であり神性である。神を愛するとは、生の全体において、無限なるもののうちで自分があらゆる制限を脱しているのを感じることである。」と書いている。これは、先に引用したヤスパースの愛の規定と通ずるものである。愛によってのみ、客体的なもの、良し悪しを比較するもののすべてを打ち砕くことができる。前出の相見三郎は、聖書の「神は愛なり」の解説のなかで「私たちが互いに愛し合う、そこに現わされたものが神というものです。」と言い切っている。神を愛するとは、愛を

愛するということになるが、このことについては、ハンナ・アーレントの「アウグスティヌスの愛の概念」<sup>28</sup>に「自己否定の現実化こそ隣人愛に他ならない。隣人愛にあっては、そもそも愛されるのは隣人ではなく愛それ自体なのである。」とあり、うなずける。

それでは、「愛」に対応する、われわれに身近な仏教の教えは何か。ひろさちやの「愛の研究」では<sup>29</sup>キリスト教、仏教、イスラム教における愛が比較対照的に論じられている。神の愛に対する仏の慈悲の性格も述べられている。キリスト教も仏教も共に自覚の宗教であるという啓発的な記述もある。しかし、衆生の側から仏に向かう運動としての愛に該当するとならぬはなされていない。メリトクラシーが相対的、一時的価値判断であるとするなら、これを超えてゆくものは同じ世間的価値ではあり得ない。それではメリトクラシーを肯定することになる。出世間的価値でなければならない。メリトクラシーを超える生き方自体が仏道そのものであると考えるが、その向かうところが「仏」で抵抗があれば、「無量無辺の虚空」と受け取ればよい<sup>30</sup>。こころのベクトルが常にそちらを向いていれば、いわば仏と対等となり、他人や自分の行う世間的価値判断に対して、次元の違う対応が出来るはずである。

このベクトルの表現として、三つの候補があげられる。ひとつは、「行」である。曾我量深は、「始めに行あり」<sup>31</sup>のなかで、「仏教の行は純粋の行である。求める相手もないし、求める主体もない。そういうものは一切ない。それを純粋行という。仏教の行は分別の計らいを入れないこと。人間の利己的な計らいを一切入れないのが仏法の行である。いわゆる諸善万行というならば、人生のあらゆる行、朝起きて口をすすぎ顔を洗う、これはみな行である。」と述べている。第二の候補は、「回向」である。仏教語大辞典<sup>32</sup>によると、①方向を転じて向かう。②悟りに向かって進むこと。③向かわしめる。④功德を他にめぐらし、さしむけることとある。第三の候補は、「願」である。清水寺元貫主大西良慶老師の言葉に<sup>33</sup>、「仏さんになるということは、出発点に願がある。願があれば行が出てくる。希望があったら運動が出てくる。」とある。願も愛の有力な候補である。行も回向も願も仏と衆生の間の双方向の働きかけである。従因向果と従果向因が同時、一体である。この点もキリスト教の愛と即応している。仏教においては、回向や行や願がヤスパースの愛の規定「具体的なことを通じて、全体性、絶対性に向かう運動」と即応している<sup>34</sup>。「愛」のようにもっと身近で率直なイメージで受け止められることを期待したい。あるいは、「愛」という言葉に、行、回向、願の意味を感得すればよいのである。愛によって、自由な精神が尽十方界の真実と連なり、どんな難局に臨んでも無限の能力を発揮できる「没量の大人」<sup>35</sup>であることができるのではないか。

最近、自分の力でどうすることもできない複数の障壁にぶつかり、茫然とする状況が幾度かある。ヨブ記をあらためて読み直してみる機会にもなった。メリトクラシーからみれば不条理の壁である。人生において具体的で不条理な障壁に直面しながらも、旅人のように新鮮な畏敬と寛容と挑戦者の心を持ち続け、「ミンナニデクノボートヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ」<sup>36</sup>生きるとは如何なることか、という課題が本ノートをまとめる第3の動機となった。

## 注

- 1) M・ヤング 「メリトクラシー」 窪田鎮夫、山元卯一郎訳、至誠堂、昭和57年  
原著は、“The Rise of Meritocracy”, (メリトクラシーの勃興)、1958年  
Geoff Dench “The Rise and Rise of Meritocracy” Blackwell Publishing,2006にはM.ヤングのインタビューが掲載されている。  
(Looking Back on Meritocracy) メリトクラシーは、Concise Oxford English Dictionaryでは、“Government by people selected on merit” とある。
- 2) 竹内 洋 「日本のメリトクラシー」1995年、東京大学出版会、頁31  
メリトクラシーの位置づけについての解釈理論的説明など説明理論の紹介が興味深い。
- 3) 堀尾輝久 「現代社会と教育」岩波新書、1997年、頁112  
「私たちはこのような知の序列化と知の支配に結びつく現代能力主義を厳しく批判しつつ、その上で、人間の能力の多様さ

- と、人間にとっての知の意味を捉えなおし、人間が学ぶ存在であることの意味を深くとらえ直すことが必要である。」
- 4) 秋山博正、原田和男、松田正典「文明のダイナミズム」、くらしき作陽大学仏教文化研究センター紀要、2008年5月  
松田正典広島大学名誉教授には20代の初めに浄土真宗についての教えを受けた。
  - 5) 谷 昌恒 「いま教育に欠けているもの」、岩波ブックレット、1985年、頁7  
谷 昌恒先生については、情報学部吉村文男教授から教えていただいた。
  - 6) 林 竹二 「教えるということ」現代教育101選、国土社、1990年、頁163
  - 7) 細川 巖「信は人に就く」(唯信鈔文意講義)、法蔵館、1978年、頁158  
物理現象の因果性については、M・ブング「因果性」黒崎宏訳、岩波書店、1972年に詳しい考察がある。1970年代から活発に研究されている非線形現象の物理では、決定論的に表現できても原因から結果が予測できない現象が多く存在することが分かり、因果性について新たな認識の道が開かれた。(D・ルエール「偶然とカオス」青木薫訳、岩波書店、1993年  
勿論ここで釈尊の四諦の教えにおける出世間の因果構造を否定するのではない。
  - 8) 酒井得元老師提唱、返照、第565号、平成11年6月号  
酒井老師には、20代の半ば以降、呉神応院の参禅会で坐禅について教えを受けた。
  - 9) ニコル・オレーム「質と運動の図形化」、中村治訳、中世思想原典集成19所収、平凡社、頁451  
尤も、科学があらゆる意味で価値自由であり得るかについては、最近のパラダイム論争や解釈学研究に注目する必要がある。  
野家啓一「科学の解釈学」ちくま学芸文庫、2007年  
H.Kincaid et.,al. “Value-Free Science?” Oxford University Press, 2007年
  - 10) 平成20年からの不況で、組み込みシステム産業界でもこれからの技術として新しい価値観の開拓が叫ばれ、環境適応技術とこころの豊かさを実現する技術が真剣に検討されている。(組み込み技術展2009)
  - 11) J.ハーバーマス 「イデオロギーとしての技術と科学」長谷川宏訳、平凡社、2000年、頁55  
H. マルクーゼ 「一次元的人間」生松敬三、三沢謙一訳、河出書房、1980年、頁35「テクノロジーと科学を手中におさめた産業社会は、人間と自然をつねにより効果的に支配するために、その資源をつねにより効果的に利用するために組織されている。こうした努力の成功が人間の経験に新しい次元を開くとき、この社会は非合理的となる。」  
基礎科学力強化に向けた提言(基礎科学力強化委員会(野依良治座長)平成21年8月4日)では、「成果だけでなく、努力することも評価し、研究をやりぬく力や努力を重視する研究風土を醸成することが重要である。そうした風土を徹底させるため、研究者の社会だけでなく、わが国の社会全体の意識改革が重要である。」「競争の風土のみならず、協奏的風土の醸成と、それを推進するリーダーの養成が不可欠である。」とある。
  - 12) C. クリステンセン「イノベーションのジレンマ」伊豆原弓訳、翔泳社、2001年、頁9
  - 13) 宮田加久子「無気力のメカニズム」誠信書房、1991、頁36には、「今の教師も親も、とかく勉強面ばかりを重視し、勉強面ばかりをすべての評価とうけとめやすい。すると子ども自身が勉強の評価ばかりを気にするようになり、勉強で失敗したときに、過度にコントロールできないと感じ、大きなショックをうけ「何をしても自分はダメな人間だ」と考えやすくなるだろう。その結果、勉強以外の広い範囲で無気力になり、登校拒否を起こすこともあるだろう。」とある。
  - 14) C. ファイン「脳は意外とおぼかである」渡会圭子訳、草思社、2007年、頁36に、適切な決断には、感情の標識が不可欠であることが実験的に示されている。
  - 15) 本田由紀 「多元化する能力と日本社会」NTT出版、2005年、頁259
  - 16) 遠山 啓 「競争原理を超えて」太郎次郎社、1976年、頁235  
新村洋史「大学生が変わる」新日本出版社、2006年、頁134には「人間とは、個人的欲望で満足するような単純で卑小なエゴイスティックな存在ではない。それ以上に人間とは社会的で共同的な存在である。個人的利害を超えて社会的公共性(公共善)に基礎付けられた義務でお互いが結ばれている」とある。
  - 17) E. デシ、R. フラスト「人を伸ばす力」桜井茂男監訳、新曜社、1999年、頁62 本書は、情報学部松浦宏特別教授に紹介していただいた。
  - 18) 個人主義については、佐伯啓思「人間は進歩してきたのか」PHP新書、2003年頁205の記述が興味深い。「人間が神を見失えば、つまり宗教を見失えば、資本主義や近代市民社会の合理性は硬直化してゆき、むしろ非合理的なものに転化してしまう。」
  - 19) James Surowiecki “The Wisdom of Crowds”, Anchor Books 2004. Page 11 “You could say it's as if we've been programmed to be collectively smart.” 集合知の形成条件として挙げているのは、diversity of opinion (多様性: 個人が自分の意見を持っている)、independence (独立性: 個人が干渉されない)、decentralization (分散性: 身近に情報源を持っている) aggregation (集約性: 個々の意見から全体の意見を導くメカニズムが存在する) の4つである。集合知の代表例の一つがLinuxであるとして紹介されている。  
マイクロソフトのWindowsは競争には勝ち残っているが、コンピュータ技術上の意義やその発展性の上では、ソースをオープンにしていないWindowsよりもLinuxの方がはるかに優れている。(Windowsの評価については、情報学部大崎幹雄教授とのディスカッションを参考にした)
  - 20) 大原荘司「全体性と科学」奈良産業大学紀要第21集、2005年、頁95
  - 21) 相見三郎 「コリント人への第一の手紙講解下」霊化教会、昭和49年、頁123
  - 22) 沢木興道 「禅戒本義を語る」沢木興道全集第十巻、大法輪閣、昭和38年

- 23) 日立デジタル百科大事典、平凡社、1998年
- 24) K・ヤスパース 「真理について（理性と愛と象徴）」小倉志祥、松田幸子訳、理想社、1985年、頁200  
 亀井勝一郎は、「愛の無常について」の終章で、「永遠の愛というものがあるとすれば、それは永遠の凝視でなければなりません。」と述べているが、通ずるところがある。
- 25) 聖徳太子 「勝鬘教義疏」国訳一切経、経疏部十六、大東出版社、昭和39年
- 26) 奈良産業大学主催で、毎年行ってきた高校生向けの作文コンテストのテーマ。
- 27) G・ヘーゲル 「キリスト教の精神とその運命」細谷貞雄、岡崎英輔訳、1998年復刻、白水社、80頁 この本は、情報学部花岡永子特別教授に紹介していただいた。  
 哲学事典（平凡社、1971年）に引用されているヘーゲルの愛の定義は、「精神の統一性がそれ自身を感じているのが愛」とある。
- 28) H・アーレント 「アウグスティヌスの愛の概念」、千葉 真訳、みすず書房、2002年、頁135
- 29) ひろ・さちや 「愛の研究」、新潮社、2002年、頁205  
 慈悲についての解説は、中村元「慈悲」。平楽寺書店、1981年に詳しい。「われわれにかかる苦しみを与えた世界創造神が絶対の慈悲であるということは考えられない。」「われわれは仏の慈悲を神の愛と直ちに同一視することはできない。」と述べられている。
- 30) 国訳一切経、大方等大集経巻第十三虚空蔵品に「世尊は大捨の行もて一切の憎愛を断ちたまふ、心虚空の如くなるが故に」とある。  
 何かを信じ込むことが宗教的アプローチの前提であるという一般的誤解がまず払拭されなければならない。
- 31) 曾我量深 「始めに行あり」曾我量深選集第十二巻、昭和47年、弥生書房  
 同じことを酒井得元老師は、「正法眼蔵と坐禅」、大法輪閣、頁238に「すなわち、仏が自ら行ずるということにほかならない。」と述べている。  
 また、正法眼蔵御抄には、行持の道環について「行持ノ行ノ字、教行證ノ行ニアラス、證ヲ待タサルユヘニ。所詮佛祖以ッテ行持と名ツクルナリ。道環トハ始中終ニカカハラサル儀ナリ。」とあり、結果の良し悪しに依存しない行が説かれている。
- 32) 中村 元 「仏教語大辞典」昭和56年、東京書籍  
 太田久紀の名著「凡夫が凡夫に語りかける唯識」大法輪閣、頁475に「回向は、よいことや得になることを隣人と分かち合うことだ。低劣な精神を高貴な仏道に差し向けることだ。」とある。  
 曹洞宗の修証義には、「たとえ仏となるべき功德熟して円満すべしというとも、尚廻らして衆生の成仏得道に回向するなり」と説かれている。
- 33) 大西良慶 「心」第三巻、法相宗宗務所、昭和48年、頁49  
 仏から衆生に向けられる願は、誓願と呼ばれる。四弘誓願文がよく知られている。  
 昭和の親鸞と呼ばれた住岡夜見の言葉に「念願が人格を決定する」とある。
- 34) 仏教では、無我を説く立場から絶対的真理があると受け取るかどうかは議論のあるところであるが、仏の冥加は実感される。  
 石飛道子「ブツダと龍樹の論理学」サンガ、2007年、頁262に「空であるのは一切のものである」という言明が空であるかどうかの論述が詳述されている。  
 またこのことに関係して、無自性において縁起が否定されると考える実在論の立場と縁起が成立すると考える中観論の違いは仏教者ならばわきまえておかなければならないと感じている。
- 35) 酒井得元「正法眼蔵と坐禅」大法輪閣、平成20年、頁88に瑩山禪師の「坐禅用心記」のことばとして引用されている。
- 36) 宮沢賢治の遺品の手帳から見つかった有名な詩の一節である。法華経常不軽菩薩品に描かれる、常不軽菩薩の生き方（「我は、敢えて汝等を軽しめず。汝等は、皆当に仏となるべし」聖徳太子著法華義疏（花山信勝校訳）より）を表現したものと理解されている。